

# 佐藤春夫と一九一〇年代（二）

——ニーチェ・鷗外・大石誠之助との関わりをめぐって——

## 石崎 等

### 五、鷗外の『阿部一族』

『意地』は一九一三（大正二）年六月、初山書店から刊行された森鷗外の作品集で、『興津彌五右衛門の遺書』『阿部一族』『佐橋甚五郎』の三篇を収める。鷗外が明治天皇の死と乃木希典殉死のあと、新たに筆を入れ始めた歴史小説という文学領域である。評論『新らしき歴史小説の先駆「意地」を読む』を考察する前に、佐藤春夫が主として論じた『阿部一族』（一九一三・一『中央公論』）について最低限の概観を示しておきたい。

『阿部一族』は『阿部茶事談』や『忠興公御以来御三代殉死之面々抜写』という史実を典拠にしている。テキストと史料をめぐる詳細な考察と論議はかなりの数に上るし、その問題点も整理されている。しかし佐藤の評論を検討するに際し、それらはさしあたって必要がない。

『阿部一族』の全文は一三の部分に分かれ、前半五つのパラグラフには、熊本の細川藩主忠利の死とその葬儀、細川一族の履歴、

寵愛した二羽の鷹の殉死のエピソード、殉死者のことが描かれている。中でも君の恩顧を受けてそれに報いた一七歳の内藤長十郎元継の死が特筆されている。さらに殉死を許された老若の家臣一七名の事蹟が紹介され、犬牽きの津崎五助のエピソードが紹介される。鷹や犬の超自然的な殉死は忠利の高徳と人望を強調するために作られたものであろう。

鷗外の筆は、殉死の歴史的意義、嫡子光尚への新たな（忠義）、殉死を許すことが家臣への（慈悲）なのかどうか、あるいは（報謝と賠償）などについて、作者の感想とも忠利や長十郎の内面心理ともとれる描写に及んでいる。ここまでは阿部一族の悲劇への序幕であり背景とでもいいだろう。

第六のパラグラフ以降は、殉死を許されなかった阿部彌一右衛門を当主とする阿部一族の（意地）がテーマとなり、彌一右衛門の「人と親み難い処」をもつ性格ゆえに、忠利―光尚はおろか藩内においても人間関係の齟齬と誤解とを増幅させ、それが拡大してやがて悲劇へと追い詰められていく姿が描かれている。

家臣同士の熾烈な競争意識は時に武家社会に危機と亀裂をもた

らす。主君の死や殉死はあらぬ嫉妬と中傷を肥大化させ、そこに〈意地〉からくる悲劇への転落が生じる。傍輩のちよつとした言葉が疑心暗鬼を生み人間の運命に不安定をもたらす。発端は主君から許しのない追腹を実行した彌一右衛門であり、このとき跡目処分は林外記の思惑で他家とは違う一段下の扱いをされたものの、彌一右衛門も一九番目の殉死者として正式に霊屋のそばに埋葬され知行一五〇〇石の存続は許された。しかしその処分はなぜか長男権兵衛への継承というかたちではなく、二人の弟と五人の子供たちへの分割譲与であった。本家を継いだ権兵衛は小身者として格下げに遭つてしまふ。追腹という殉死をめぐる、藩内に生じた波紋、つまり阿部家への侮蔑の念は消えることなく、権兵衛以下、彌五兵衛・市太夫・五太夫・七之丞という五人の子供たちは快々と楽しまぬ日を送ることになる。阿部家の悲運は親の血を継いだ権兵衛の〈意地〉によつて急転する。向陽院で催された先君忠利の一周忌の法会の墓前で、彼は髻を切つて武士廢業の意志を示したために君主光尚との間に齟齬が生じ、死を賜つたことからその溝は決定的なものとなる。当主が切腹という武士らしい処分ではなく犯罪者扱いの縛首という屈辱に遭つた限り、一族郎党は家に立て籠もり死への道を選ぶことを余儀なくされる。政道はそれを〈逆賊〉とみなし討手を組織し壊滅させようとする。誰を討手の大将にするか。選ばれた竹内数馬にも林外記との不確確執がからんでいる。数馬は着せられた汚名を雪ぐべく即時に討ち死を決意する。ここには〈死に急ぎ〉ともいうべき別の〈意地〉のかたちが描かれている。阿部一族だけでなく、主君の不興を買つたり棄てられることに耐えられない〈忠義〉の精神構造に関心の

眼が向けられているのである。鷗外は数馬の心境を「妻子には阿部の討手を仰せ附けられた丈手短に言ひ聞せて、一人ひたすら支度を急いだ。殉死した人達は皆安堵して死に就くと云ふ心持であつたのに、数馬が心持は苦痛を逃れるために死に急ぐのである。」(傍点引用者)と書いている。妻は排除され、男の〈意地〉をあくまでも貫こうとする情念だけが突出している。

阿部権兵衛にしても竹内数馬にしても、主君の側近である奸物林外記へと非難の矛先が向けられていない不思議さがある。反面は〈忠義〉や〈意地〉の範疇で行われ、武家社会や藩の外への通路をもたない。阿部彌一右衛門の切腹は「安堵して死に就く」ようなものではない。息子権兵衛の処刑は無念の一言に尽きるだろう。また数馬の〈死に急ぎ〉の情念は林外記に傷つけられたことよりも〈殿様に棄てられた〉という絶望的な気持ちからきている。不思議な〈忠義〉の誠心であり、〈意地〉の精神ではないか。さらに言えば、阿部家の隣に住み親しく往来していた柄本又七郎は、主君からの「火の用心をせい、手出しをするな」という沙汰を無視し、〈情は情、義は義〉と割り切り、〈己にはせんやうが有る〉と決心して、討手の一員でもないのに槍を持って阿部家に乗り込み、彌五兵衛に深手を負わせ、後に美談として主君から厚遇されたというエピソードが書き付けられていることである。これもまた〈忠義〉の一例であるが、阿部一族の悲劇を相対化するかのように付け加えられた柄本又七郎のエピソードをどう解釈すべきか、見解が分かれるところである。高橋義孝は「理非曲直を問おうとせぬ意地を貫き通す人間の姿」を認め「鷗外には、そういう非情刻薄の世界を深く愛していた気配がある」とする。〈非情

刻薄の世界」云々はさておき、柄本又七郎の行為に（理非曲直を問おうとせぬ意地）があるとする見方はどうであろうか。そこには鷗外のアイロニーがないだろうか。この点に関しては後述する。また討手の一員でありながら、何の働きもしなかつた臆病者の畑十太夫が吟味を受け追放処分を受けたことが語られる。武士の恥として特記されたのであろう。

内藤長十郎を始めとする一八人の殉死、主命による（逆賊）として滅亡した阿部一族、竹内数馬の討ち死、柄本又七郎の武勇と出世、畑十太夫の追放——主君と家臣をめぐる武士たちの興亡物語はさまざまに変奏され『阿部一族』を彩っている。

## 六、『新らしき歴史小説の先駆「意地」を読む』の方法

佐藤春夫にとつて『意地』は「いろいろな意味で私の心を動かし」、批評することは「自分に対する自分の用事」と思われた。尊敬する鷗外だということもあり、一つの方法を自分に課することにした。それが佐藤の方法的戦略であつた。褒めたいときには筆を抑制し、疑問があつたときには勉めて詳しく書くという方法である。そうした方法は批評のあり方だけでなく、小説の可能性の総体を浮かび上がらせると考えたようだ。だがそのバランスが妥当であつたかどうかは検討に値する。

ところで、『阿部一族』の初出稿は『意地』収録に際して若干の添削がなされた。決定稿との差異は主題を変えるまでには至らない。高橋義孝は二つのテクストを比較して「決定稿においては、一切がより客観的、より史実的、より精確に変えられて」おり、

「主観的な表現や判断や描写はすべて削りとられて、その代りに、簡明な事実や数字が登場している。心理描写は引込んでしまつてゐる」と述べている（『森鷗外』二八四―二八五頁）。要するに、心理的な解剖を嫌い、史料を重んじ史実に即すという姿勢が強まつたということだ。佐藤春夫はそうしたテクストクリティックには一切興味を持たず、「主観的な表現や判断や描写」に違和感を抱き注文をつけたのである。

佐藤は（悲劇）の根源ならびにいくつかの問題点を指摘している。なるべくその趣旨に添い、文章を尊重するかたちで簡条書きに整理し、必要に応じてコメントしていくことにする。

その一。『阿部一族』を読んで（私の心は重苦しく）なつた。この（可なり大きな悲劇）は何から生れたのか、という疑問に駆られた。主君・細川忠利の性格、家臣・阿部彌一右衛門の性格の点から悲劇の原因を考えることはできない。佐藤は（性格）（時代）（境遇）を一括して（運命）とするが、彌一右衛門と忠利との関係だけでは事件は発展しない。（悲劇）を大きくさせたものは嫡子権兵衛である。二人の性格には共通するものがある。その意味では、阿部一族の（悲劇）は運命悲劇・性格悲劇の両面を兼ね備えており、事件の発展に伴つて（性格）（時代）（境遇）が順次拡大していった結果から生れたものである。

こうした（性格悲劇）や運命観にはいくぶんか、佐藤の個人的な心情と通底するものがあつたといえるだろう。

その二。家臣一八人に殉死を許した忠利の心境を叙した件とお犬牽の津崎五郎の辞世吟に言及した後で、佐藤は作中にとどき現れる（説明的の記述）には（過去の、道德の、貴族的でない）方面を

理解させると共に新しい道徳の行く手に対しても多少の暗示を与へてゐるかのやうに私には見える。(傍点引用者)と鷗外を称揚しその歴史小説への共感を示した。ここでの(道徳の貴族的ないい方面)という言い方は明らかに生田長江の鷗外論を踏まえている。さらには「小説と云へば雪隠と台所と書齋との隣りあつた生活を描くものとのみ思つて啓蒙的な破壊思想や影のないほどの享楽の哲学などをみ至上のものと心得てゐる」当時の文壇人を批判することによつて鷗外のこころみを意義づけた。

その三。にもかかわらず、『阿部一族』は面白いけれども、自分一個にとつて不満がある小説であり、小さいことかもしれないと断わりつつその理由を列挙してみせた。

①説明の部分が長く、読み手の興味を殺ぐ。

②枝葉末節の人物の祖先のことが裝飾的に書かれているが、事件の外郭はもう少し手短かに書くべきである。

③それに対して、(サイコロジカルな描写)のところはもつと書き込むべきである。たとえば一七歳で妻があり、老母のいる長十郎の殉死の心持について佐藤はこう書いている。

長十郎は何故死を怖れる念が微塵もないのか。心持ちが緊張して居る時には誰でも死などを怖れるものではないといふ意味であらうか。それとも、あれは死を怖れないといふあの時代の文明の産んだ思想からであるのだらうか。この辺のことは、少し詳しく書いて置いて頂きかたつた。(中略)文明批評といふ上から言つて見てここの事は最も詳しく筆を振るべき場所の一つではなかつたらうか(ゴチック体は引用者)。

年の若い者は——異性に対してかう散文的な考ばかりでなく、もう少しは余分な感情を持つて居るものではなからうか。

鷗外はそもそも佐藤が要求する(文明批評)など放棄している。(武士道)についても根本的な相違が見られる。この問題を佐藤の関心に引きつけてみるならば、「大逆事件」の刑徒の多くが(死を怖れる)ことなく、従容として死に赴いたこと、とくに大石誠之助の悟りきつた態度を考えることに通じている。そこには死を超越する至上の価値が存在していたからだらうか、それとも不条理かつ理不尽な(法)の権力に人間の尊厳を賭けて対峙した結果であらうか。その点については、第九節「獄の裡、獄の外——大石誠之助と佐藤春夫——」において詳細に検討されるであらう。

佐藤は、長十郎が、死後、老母と若い妻が手厚く養われることを信じていることに触れ、それがあまりに人間離れをしていると指摘し、畑十太夫の臆病さについても同様だと批判する。二人とも(習俗的に誇張された人物)だとするのである。こうした点については、(事件の解釈のなかにあまりに沢山作者自身のみ寓したロマンテイクな企てのやうに思へる)からだとする。そして鷗外は多くの人物を登場させながら、(だが人間はただ一人しか現はれない。ただ一つの性格をしか表はして居ない。おそらくそれは作者自身であらう。(中略)作者の持つて居る「人間らしさ」は極めて狭いものだとも云はれよう。(ゴチック体は引用者)と論難する。

ここには返り血を浴びることを潔しとしない青年の決断が表明されている。

何ら誇張されることのない習俗を超越した近代人としての個性が迎える（死）。——このような佐藤の想念は限りなく大石誠之助の境地に接近していかざるを得なかったのではないだろうか。

大石にとって習俗の文明化は、家庭料理、家庭破壊論や自由結婚問題から社会革命に至るまで一貫していた。『大石誠之助全集』（一九八二・八、弘隆社）二巻はそうした挑発の論理の歴史的宝庫といえる。大石への共感からか、佐藤の直感的批評はその地点まで届いているように思われる。同様な理解は、柄本又七郎の心理について佐藤が不満を抱き、（大胆にも！憎越にも！）加筆してみた点である。そこには、情け深い武士としての柄本の心情が色濃く出たフレーズが書き加えられているのである。

## 七、鷗外研究史の中の佐藤春夫

佐藤の鷗外論を高く評価している竹盛天雄は加筆のころみについで次のような疑念を表明した。

……阿部一族討伐にあたって、平素じつこんの柄本又七郎が、「情は情、義は義である」として討ち入ってゆく「心理」に対して、「これではどうしても私は解らない」とツッパねている点についてである。さらにつづけて、討伐が終わって阿部家の人たちの死体を吟味するくだり——又七郎に胸板をつかれた阿部弥五兵衛の「創」が、だれのよりも立派であったので、「又七

郎はいよいよ面目を施した」という叙述に「一体この結びは私は不服である」とのべて、「甚だ失礼なことであるが」と断わりながら、たとえば、その後に「自分の光榮につけて又七郎は更に阿部一族を思ひ出すのが苦しかった」と「書き加えて見た」と論じている点について、わたくしは興味をもつ。

佐藤の『阿部一族』の形象や叙述に対しての不十分さの指摘について、もともととして賛成する点が多いが、たとえば、ここにとり出した又七郎の描きかたをめぐる批判には、わたくしは同じがたくおもう。最も分かりやすいのは、佐藤が「書き加へ」たがる叙述などは、菊池寛や芥川龍之介らの「心理」とらえかたと、ほとんど同一方向を指すものといえなくはないか。〔佐藤春夫の鷗外読法〕『定本佐藤春夫全集』第23巻（一九九〇・一一、臨川書店）「月報20」。

竹盛氏が指摘した「又七郎の描きかたをめぐる批判」は、鷗外が極力排除した主観的な心理描写の典型的なものであったろう。大正文学者共通の（ヒュウマンインテレスト）——作品のテーマによってそれぞれが微妙に違い、その差異について佐藤や芥川龍之介の間で相互批判が行われたらしいことについては次節で言及する——が作用したものが、ここでの佐藤の「心理」のとらえかたの加筆は鷗外との（文明批評）の違いの表れだけであって、もうひとつ、同郷人・大石誠之助の死というバイアスがかかっていたように思われる。さらには、柄本又七郎がいう（義）とは正しい意味での（義）だったろうかという疑問も浮上する。こうした問題と間接的につながるが、尾形侑が次のように指摘してい

る点は注目される。

鷗外が、討入りに関係した諸人物の事件後の処遇に言及したのは、殉死後の遺族の処遇に関する記述と対応するもので、それは殉死の悲劇の生起した封建社会の機構と、その中心に位置する封建権力の絶対性を明らかにしようとする意図につながるものといっている。そしてそれらの後日談の中でも、ことさらに柄本又七郎の処遇とその言行について特筆しているのが注目されよう。(中略)しかし、仕手の下命も受けずに阿部屋敷に討入った柄本又七郎の行動は、実は竹内八兵衛同様、軍命に背いた廉をもつて一応の詮議は免れぬはずのところであった。(中略)鷗外はこの点について何ら穿鑿を加えることなく、たゞ又七郎をば元龜・天正の戦国的武人像につながる古武士の典型として賛しているかのごとくに見える。それは、かれの生きた時代の武家社会における慣習を免れがたいものとして甘受しながら、その中で精一杯人間らしく生きようとする又七郎の言行に、鷗外好みの人間像(それは人間類型としては「護持院原の敵討」の九郎右衛門、「大塩平八郎」の坂本鉦之助らにつながるものである)と重なるものがあつたからであろうか。それとも、この作品の内包する、個我と絶対権力との対立というテーマを、又七郎の像をクローズ・アップすることによって、武烈談としての隠れ蓑の中に隠蔽しようとする意図に基づくものであつたろうか。(日本近代文学大系12『森鷗外集Ⅱ』(一九七四・四、角川書店)「阿部一族」補注八三二、同書六四九〜六五〇頁)。

尾形仿の鷗外に関する第一論文として「鷗外歴史小説の史料と方法——『興津彌五右衛門の遺書』と『阿部一族』」(『東京教育大学文学部紀要』第七輯(一九六二・三))があるが、ここではそれから一〇年後の注釈を議論の対象とする。尾形は作品を貫く統一的な主題を「殉死の悲劇の生起した封建社会の機構と、その中心に位置する封建権力の絶対性」と見ている。それは揺るぎがないが、その他については依然として確定的ではない。それは文化的知識人としての鷗外が人間の想像力の限界にまで踏み込んで小説を書いていないという点にも原因があるように思われる。鷗外の歴史小説は題材への想像や幻想の波をかぶらない方法を徹底しているために情動に乏しい嫌いが解釈を曖昧にしている。これは佐藤の批判とは別問題である。しかし尾形仿が指摘するように、「軍命」を無視した柄本又七郎の処遇については疑義があろう。軍紀に詳しかった鷗外がそれを承知で柄本の功績を敢えて特筆したとしたら、そこにはいくらかのアイロニーを認めなければならぬまい。(「情」と「義」とをきつぱりと割り切り、「軍命」を無視して阿部一族の討伐に一役買った柄本の言行——笑いながら「元龜天正の頃は、城攻野合せが朝夕の飯同様であつた、阿部一族討取りなぞは茶の子の茶の子の朝茶の子ぢや」と言つた言葉も嫌味といえないこともない——を鷗外は全面的に肯定しているわけではないだろう。なぜなら、九州の雄藩として名高い細川藩にとって一〇名にも満たない阿部一族の叛逆など、軍事的に見てももの数ではなかつたからだ。だとしたら又七郎の言動など跳ね上がりといえなくはない。ここには鷗外のアンビヴァレントな感情が潜んでいるのではないか。

尾形仿は、柄本又七郎が〈鷗外好みの人間像〉の形象化であったか、それとも〈個我と絶対権力との対立というテーマ〉を隠蔽するために仕掛けられた〈武烈談〉の表象であったのかについての判断を停止している。冷静な読者なら、これは〈武烈談〉として寿いでなどいいないことに気づくだろう。〈逆賊〉を積極的に討ち抜け目なく論功行賞を受けることが古武士の条件だとしたら、柄本も坂本鉦之助も圧倒的な魅力ある人物とはいえない。古武士の風格を有した乃木希典と対比させるならばとても〈鷗外好みの人間像〉とは程遠い。乃木の殉死は二人の息子を日露戦争で失い、乃木家の断絶を意識した純粋な行動であった。

江戸時代初期の武士の実態やその表象としての討入りや殉死は、本来、大道寺友山（一六三九—一七三〇）の『武道初心集』が「捨る身命ならば諸手に勝れたる働を任りて討死を遂敵味方の耳目を驚かし主君大将の御おしみんな預り子孫永く面目にも備へんと有る心懸をこそ武士の本意とは仕るにて候」（四三、つねに功名手柄を志すこと）と述べているように、たとえ小身武士であらうとも、子々孫々に至るまで〈名聞〉や〈体面〉や〈家督〉を守り抜き、より高い〈禄〉にありつくなど、さまざまな思惑が複雑に折り重なったものであり、鷗外と親交があった乃木とは異質なるものであった。ただ鷗外の歴史小説執筆の衝動を考えたら、『阿部一族』や『大鹽平八郎』における決起が〈家〉の廃絶を前提としているがゆえに不純なものを含んでいないという点においてわずかに乃木の殉死につながるものがあつたといえるだろう。

佐藤春夫は乃木大将の殉死直後の一九二二（大正元）年一二月、『スバル』に「同時代私議」という総題で『乃木大将を悼む言

葉』『乃木大将の死に就いて世の新聞記者に言ふ』という二篇の〈傾向詩〉を発表している。そのことと鷗外が描いた『阿部一族』の人物像に疑義を懐き加筆にまで及んだこととはある面で通底しているのである。

佐藤の加筆は、柄本が〈鷗外好みの人間像〉の形象化だとしたら、テーマを補強し阿部一族の〈意地〉を強調するためだったことになり、〈個我と絶対権力との対立というテーマ〉を隠蔽するために仕組まれた〈武烈談〉だとしたら無意味な作業といえるのではないか。小説の最後では、五男七之丞のために不覚ともいえる傷を負い、それが癒えた柄本が主君光尚から鉄砲十挺を預けられ、隠棲のための屋敷地を貰ったことが記され、背後の藪山もどうかと問われ、それは辞退している。これが〈武烈談〉の後日譚である。

佐藤の加筆衝動には『日本人脱却論』の序論「以来心中にくすぶっていた〈武士道〉の根本精神——それは単一のように見えるが実は多様なものである——に対する疑いがあつたからである。

その四。『阿部一族』の欠点を要約して、(1)史実の輪郭に満足して内容を掘り下げることを怠った、(2)描写の遠近法が無視されている、(3)時代背景の描写不足、(4)センチメンタルエレメント（情緒的要素）が不足している、(5)人間の解釈が通俗的である、(6)空想がやや貧弱である、の六点を挙げている。

その五。『意地』収録の他の二作——『興津彌五右衛門の遺書』を面白くないとし、『佐橋甚五郎』は事件のまとまりがあり、完全な立派な作品として認めている。この簡潔な評価は、佐藤の関

心が、運命悲劇・性格悲劇の両面を兼ね備えている『阿部一族』のみにあつたことを物語る。

以上の通り、『阿部一族』を分析することによって、佐藤は一般論として〈殉死〉が行われた時代背景や人間的な考察が深まらないと、〈殉死〉する人間の心理など十分に解明できないという結論に達する。鷗外の小説にもそうした欠陥があり、〈殉死〉の心理について十分答えていないという批判を懐くに至るのである。

竹盛天雄・尾形尙鷗外研究の大家の言説を前にして、若書きの評論を弁護したいのは佐藤の〈武士道〉批判の情熱のありかを探りたいという一点に尽きる。〈武士道〉がひとつの〈抽象〉であるとしたら、それを批判することもまたひとつの〈抽象〉に過ぎない。それは具体的に批判されなくてはならない。

『日本人脱却論』の序論』では、「日本人では殺されるべきものが自殺の形式をする武士道と云ふものが尊重される」という重要テーマを抱えているが、〈武士道〉への嫌悪感を抽象的にしか批判できなかった。それから約二年後、乃木殉死をきっかけにして書かれた鷗外の歴史小説と取り組み、具体的なテキスト分析を通して、その問題意識がより鮮明になってきたといえるだろう。文末には、一九一三（大正二）年六月に生田長江が翻訳出版したフローベールの『サランボー』を読み、同じ作者の『ヘロディア』を英訳で読んで参考としたことが付記されている。佐藤の勉強ぶりが表れているといえるだろう。

カルタゴと傭兵軍との戦いを描いた歴史的ロマンス小説『サランボー』やアンチパスとの結婚によって大帝国の妃となる夢を抱く

ヘロディアスの野望と、二人の結婚を不浄なものとして罵詈雑言を浴びせたがゆえに幽閉され、やがてその娘であるサロメの魅惑に屈した太守アンチパスによって処刑されるヨカナンを描いた『ヘロディア』には、佐藤が『阿部一族』から抽出した「その四」の(1)から(6)までの欠点はまったくくない。そのころ佐藤が理想的な歴史小説像をフローベールに求めていたことは確実である。鷗外という〈テベス百門の大都〉（木下杢太郎）と評される博識と文業に立ち向かうために、徹底的に古代カルタゴの歴史や文化的な資料を読み砕き、そこに自らの想像力を点火させたフローベールの歴史ロマンスを強力な援軍として、フローベールの小説にある特色を規範に載いて鷗外の欠点をあげつらったわけである。ここには、佐藤の西洋文学に準拠した文学観が露呈している。リアリズム小説の極北であり、一方古代オリエントを舞台にした歴史的ロマンスの創作者フローベールの文学を借りて、鷗外の歴史小説批判のトレーニングを行うなど、若き佐藤春夫にとってなかなか心憎い批評戦略だったといえるべきであろう。

#### 八、歴史小説の作法——佐藤春夫対芥川龍之介

『阿部一族』にこんな一節がある。

人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の拠りどころが無い。忠利が彌一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。（中略）まだ猪之助と云つて、前髪のあつ



た時、度々話をし掛けたり、何かに手を借して遣つたりしてゐた年上の男が、「どうも阿部には附け入る隙が無い」と云つて我を折つた。そこから考へて見ると、忠利が自分の癖を改めたく思ひいながら改めることの出来なかつたのも怪むに足りない。

彌一右衛門の性格を鷗外と同定するわけではないが、多くの人間の殉死を描いても、そこには鷗外という稀有な個性が立ち上がってくる。それを肯定的にみるかそうでないかは見解が分かれるところであろう。ましてや上下の身分秩序を考慮しなければならぬ題材を描いたとき、人間同士の好悪の扱いはより一層難解になる。斎藤茂吉は忠利と彌一右衛門の關係について「人間性格のジンパシイ、アンチパチイの微妙にして重大な問題」としてとらえ、小説の結末にいたる「大切な導線」とした。

佐藤春夫の『阿部一族』批判は今でこそ鋭い作品分析の古典として高い位置づけがされているが、当時の文壇ではどうであつたか。「客氣に逸つて、才に傲るといふ傾き」(生田春月『驚くべき早熟の男』)がなかつたかどうか。文芸時評では点の辛い正宗白鳥でさえ私信の中で『阿部一族』を「佳作」という評価をしている(一九一三年一月二日付、上司小剣宛)が、それが一般的な見解ではなかつたかと思われる。

流行作家としての地位を確立した一九一九(大正八)年、雑誌『新潮』の六月号は「人の印象(二九)」として『佐藤春夫氏の印象』を組んでいる。寄稿者は谷崎潤一郎・生田春月・芥川龍之介・奥栄一・与謝野晶子・生田長江の六人。それぞれに興味深い

エピソードが語られているが、中でも注目されるのは芥川の「何よりも先に詩人」という簡条書きの四つの短文からなる批評であつた。その「三」に曰く、

佐藤の作品中、道徳を諷するものなきにあらざらず、哲学を寓するもの亦なきにあらざれど、その思想を彩るものは常に一脈の詩情なり。故に佐藤はその詩情を満足せしむる限り、乃木大将を崇拜する事を辞せざると同時に、大石内蔵助を撲殺するも顧る所にあらず。佐藤の一身、詩仏と詩魔とを併せ蔵すと云ふも可なり。

一九一七(大正六)年四月、佐藤が芥川宅を訪問して二人の交際が始まつた。そして江口渙と企画した『羅生門』の出版記念会によつて關係は急速に深まる。以来、互いに一目を置く存在となる。

佐藤文学の諷刺や寓意の根底に「一脈の詩情」を認めた芥川は、その「詩情」を満足させるために、乃木將軍の殉死事件を題材にした「乃木大将を悼む言葉」『乃木大将の死に就いて世の新聞記者に言ふ』という「傾向詩」が書かれる一方、他方において「大石内蔵助を撲殺する」ことを顧みないのだという。ともに「死」にまつわる武人の生き方について注視していることはいふまでもない。そして前者が「詩仏」だとしたら、後者は「詩魔」だとするのである。

一海知義によると、「詩魔」とは「詩の悪魔、詩の魔力」だといふ<sup>14</sup>。魔力は魅力でもあると言ひ、漱石の漢詩の一節「一日清閑

無償鬼 十年生計在詩魔」(一日の清閑 償鬼無く 十年の生計 詩魔に在り)を引いている。これは『広辞苑』に定義する「詩情を刺激して作詩に耽らせる神秘的な力」と同じであろう。芥川の場合、大石内蔵助を〈撲殺〉などしなくてもいいのという思いが含意されており、強引に〈撲殺〉をするというマイナスの詩的想像力の意味に使われているように思われる。佐藤の〈詩情〉は時に応じて相矛盾する様相を示しているのではないかと、皮肉っているようにも思われる。

芥川の場合、後年『將軍』(一九二二・一『改造』)を発表して乃木將軍を戯画化するが、描かれている乃木像は複雑である。一九二二(大正元)年二月、佐藤が『スバル』に『乃木大將を悼む言葉』『乃木大將の死に就いて世の新聞記者に言ふ』という二篇の〈傾向詩〉を発表したことはすでに触れたが、その頃、芥川としては、乃木の行為と佐藤の反応に同じたくない心境があり、それが持続して『將軍』に結晶したのかもしれない。いずれにせよ、『何よりも先に詩人』には芥川のアイロニーが顫動している。佐藤との距離を意識したものであり、その機智的な表現には佐藤の『阿部一族』論を視野に入れ、その筆法鋭い鷗外批判に眉をひそめている姿勢がうかがわれるのである。

ところで、傍点を付した「大石内蔵助を撲殺する」は難解である。芥川に『或日の大石内蔵助』(一九一六・九『中央公論』)がある。題材は江口渙が芥川と菊池寛の前にして述べた話に基づく。そのとき江口は、大石義雄が細川藩の大名屋敷にあずけられているうちに気が緩んで「切腹させられるよりもっと生きていたいと思うようになったのじゃないかな」と述べたのを受けて、菊池

が「そうやってこそほんとうにヒューメンな気持といえる」と答えたという。佐藤には『或日の大石内蔵助』を批評した文献が見当たらないから、雑談の折などに芥川の小説批判を披瀝したのだろうか。もしこの仮定が正しければ、芥川のアイロニカルな文章の裏には佐藤の憎まれ口に対する反批判が潜在しているように思われる。また自分の小説には〈詩仏と詩魔〉の共存あるいは分裂などはないと主張しているように読み取れる。

『或日の大石内蔵助』は主君への〈忠義〉と浅野内匠守への〈怨念〉を秘めて用意周到な〈復讐の拳〉を果たし、江戸高輪の細川越中守の上屋敷で公儀の沙汰を待つ大石内蔵助のある一日を描いた作品である。しかしそれは江口渙の話とも菊池寛の「ヒューメンな気持」とも違った、いかにも芥川らしい主題の小説となっている。

芥川の小説は人の心の二つの領域に注意を凝らす。Aという心理の領域の裏に非Aを認めようとする。彼の歴史小説の主題は多くこのヴァリエーションである。大石内蔵助は美談として細川藩士や江戸市中の噂とはうらはらに、身をやつし〈伴狂苦肉の計〉をめぐらして〈忠義〉に生きた彼の心の重心が揺らぎ〈憂鬱〉と〈寂しさ〉にとらわれる。そして義拳同盟から離脱した〈背盟の徒〉を罵る仲間とは距離を置き、乱臣賊子、不忠の侍たちを〈憐みこそすれ、憎い〉とは思わない大石内蔵助像を浮かび上がらせる。「何故我々を忠義の士とする為には、彼等を人畜生としなければならぬのであらう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。」——ここには、芥川の〈ヒューマンインテレスト〉が表象されている。芥川の佐藤に対する違和には自らの大石内蔵

助像を擁護しようというねらいがあったように思われる。

これを大石誠之助に引きつけてみれば、彼もまた革命運動から離反していった同志たちについて、東京監獄の獄窓に縋つて富士山を臨みつつ、大石内蔵助が「背盟の徒」に懐いたと同様な感慨を思い描いている精神的構図が浮上するだろう。残された検事の訊問調査や処刑される直前の遺書類からは、起訴された二四人の仲間の間でも、厳密に言えば、〈背盟の徒〉や仲間同士の微妙な心理や感情の齟齬を読み取ることは不可能ではない。それがまた曖昧な事件と裁判の本質を露呈している証拠だが。

## 注

(7) 脱稿前後については『鷗外全集』第三五卷（一九七五・一、岩波書店）所収の「明治四十五年（大正元年）日記」に次のようにある。

《大正元年十二月十二日》瀧田哲太郎来話す。《大正元年十二月二十九日》阿部一族脱棄す。《大正元年十一月三十日》瀧田哲太郎の使に阿部一族をわたす。》

執筆期間は二週間ちよつとというところか。

(8) 『森鷗外』（一九八五・一一、新潮社）二九八頁。

(9) 大塚博は佐藤春夫の『愚者の死』の面白さを《大石誠之助を佐藤春夫と読みかえることを可能にする、二重構造的なところ》にあるとする。また《大逆事件を成り立たせていたものは、「思想」と「実行」など区別しないという点にこそあった》のであり、大石と父豊太郎の交流を踏まえると《大石の

逮捕は肉親の逮捕と紙一重のところにあつたことになる。事件は春夫にとって決して他人事ではなかつたのである。》として次のように両者の近似性を指摘する。《「思想」上の「一步」は「実行」、上の一步と等価なのである。とすれば、あるいは春夫と誠之助との間には「一步」の差もなかつたとさえ言いうるかもしれない。そのことを認識したとき春夫に見えてくるものは何か。それは、春夫が誠之助と歩を同じくしたとき彼は「殺され」るのだという認識である。》（佐藤春夫の『習作時代』（一九七四・一二、早稲田実業中学高等学校『研究紀要』第九号）一七〇―一八頁。）《死》の恐怖は本稿のテーマでもある佐藤の〈武士道〉批判と通底する。

(10) 朔太郎は〈本能〉や人間性を抑圧するものとして〈儒教〉や〈武士道〉を批判した。それは佐藤と同様な性急な抽象的な言説だが、より具体性が感じられる。《半世紀以前には儒教とか武士道とか言ふもので本能を圧迫され、政府の圧制で全く自己の個性さへ発輝する事が出来なかつた、義理と人情の衝突といふような些々たる事件に由つて僅かに自己の存在を認める事が出来たのみだ、それも、くだらぬ義理のために何時も折角芽を出した本能が打ちまかされて仕舞ふ、何といふ意気地のない人間共であつたらう》と書いている（一九一二年六月三日付、萩原栄次宛書簡、萩原隆『若き日の萩原朔太郎』（一九七九・六、筑摩書房）一四〇頁）。

(11) 岩波文庫版『阿部一族』（一九三八・五）「解説」。

(12) 『新潮』（一九一九・六）「人の印象」（二九）。

(13) 紅野敏郎「上司小剣宛書簡」（『文学史の園 一九一〇年

代』(一九八〇・四、青英舎) 九一頁。

(14) 『海知義』『詩魔』(一九九九・三、藤原書店)「はしがき」一〜三頁。

(15) 『將軍』では公私において別人のような印象を受けるN將軍(乃木將軍)の人間像が描かれている。四部構成の「四父と子と」では老境に入ったかつての軍參謀の一人(なぜか「三陣中の芝居」の主役で教養のあるもう一人の參謀穂積中佐はこの章で退場している)で、現在は中将になっている家庭に焦点が当てられ、N將軍評価をめぐる世代間の対立劇がテーマになっている。將軍は、ある面(モノメニアック)であり、また通俗講談を愛好し、日本男児の意気に感動の涙を流す人間であった。こうした將軍を通して、芥川一流の(ヒユウマンインテレスト)が反語的に示されている。

中将は息子を相手に、(一介の武弁)ではないエピソードを紹介して誤解の多い將軍の相対化を試み、N將軍が一貫して(至誠の人)——漱石もまた乃木大将の殉死を(至誠)から出たものと解釈した——であることを強調する。それに対して息子は、將軍が死を決意したその直前に妻と写真を撮ったことに違和感を表明する。(至誠)(殉死)(写真撮影)という一連のN將軍の行為を理解できないと主張する息子の論理ならびに感性と、父の思い描いている將軍像との溝は容易に埋まらない。父は仕方なく(時代の違い)という解答を出して息子との和解を図るのであった。四「父と子と」に限っていえば、作品の構造は鷗外の(五條秀麿もの)に酷似している。

(16) 江口渙『或日の大石内蔵助』について、『芥川龍之介全集』第一巻(一九六三・八、筑摩書房)「月報1」

(17) 芥川には(武士道)の(忠義)を描いた歴史小説の先駆として『忠義』(一九一七・三『黒潮』)がある。小大名板倉修理の病理をめぐる(忠義)のかたち二様(主君への(忠義)か家への(忠義)か)を主軸に、修理の(狂)——(復讐)の情念を描く。怨念の狂気の果て、錯誤の刃傷沙汰は自らの切腹、家老の縛り首、お家取り潰しという悲劇を招く。

(いしがきひとし・元本学教授)